

平成23年度学力向上のための取り組み

記入者 小 倉 雅 幸

タイトル	学習意欲の向上を目指して
学校名	白井市立白井中学校
<ul style="list-style-type: none">・ [朝読書] の実施 [読む力] の向上と部活動の朝練習終了から学級・学習活動への切り替え ・ 少人数指導・習熟度別指導 数学の授業における少人数指導。各クラス毎に定期テスト及び単元テストを参考に、本人の意志を踏まえて基本コースと発展コース分けて実施 ・ [家庭学習] の充実 毎日の家庭学習点検、教科学習プリントの点検、未提出者への声かけ ・ 定期テストへの取り組み 学習委員による各教科のポイント及び予想問題づくり テスト一週間前より [朝読書] の時間に [朝自習] の実施 放課後の補習授業の実施 ・ 夏季休業における補習授業 3年生を対象に英語の基礎基本学習を10日間実施	

平成23年度学力向上のための取り組み

記入者名 森下 康彦

タイトル	基礎学力の定着を図り、“わかる”・“できる”を増やしていく。
学校名	白井市立 大山口中学校
<p>1, 家庭学習の強化および点検の実施。</p> <p>① 全学年とも生徒一人一人に「家庭学習点検表」を配布し、生徒は家庭学習時間と簡単な内容、保護者のコメント（サイン）を記入し提出、担任が毎日点検をする。</p> <p>② 月に一度、家庭学習帳も点検し、家庭学習の内容も担任が把握する。</p> <p>③ 隔週で帰りの会を10分延長し、「家庭学習確認テスト」を行う。 課題は昨年度まで実施していた「大山口検定学習」の流れを継承し、漢字と英単語から出題する。</p> <p>④ 毎日の家庭学習点検表、毎月の家庭学習帳の点検で、未提出や家庭学習時間が少ない生徒、また隔週の家庭学習確認テストで点数の低い生徒には、個別に声をかけ、必要に応じて家庭の協力を求める。</p> <p>家庭学習を習慣化し、基礎学力の定着を図ることで、“わかる”・“できる”を実感させ、学習意欲を向上させる。</p> <p>2, 夏季休業における補習授業の実施。</p> <p>3年生を対象に夏休みの前半、後半あわせて9日間実施。 対象者から希望者を募り、1日に2時間英語・数学・国語の基礎基本を学習する。</p> <p>3, 学習委員会による定期テスト前、家庭学習時間調べの実施。</p> <p>1～3年生全学年、全クラスを対象に行い、学習時間の多かったクラスを全校集会で表彰する。 各自の定期テストの取り組みを振り返り、今後の学習計画と目標を見直す機会とする。</p>	

平成23年度 学力向上のための取り組み

記入者 山下 純

タイトル	学校として、特別な支援を要する生徒の学力保障をしよう。
学校名	白井市立七次台中学校
<p>1、生徒の学力を各教科ごとに具体的な数値で把握する。</p> <ul style="list-style-type: none">具体的な数値＝たとえば「多くの教科で、学年評定が2以下（が予想される）」 <p>2、具体的な支援方法を追究する。</p> <ul style="list-style-type: none">対象となる生徒を「科学的」に見て、学習につまずいている原因を探る。支援→評価→支援のサイクルで改善していく。教科部会や全体研修の場でも検討していく。 <p>3、対象の生徒の学力がどのくらい向上したか調査する。</p> <ul style="list-style-type: none">具体的な数値で把握する。 <p>4、数値目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none">どのレベルの生徒を、どの程度まで向上させるのかをはっきりさせる。「いつまでに」「どの数字まで」という数値を目標に入れる。これによって「どの生徒を」「どのように支援すれば」「どこまで向上するのか」ということが検討できる。また、全職員が具体的な情報を共有できる。いつでも、だれでも対象の生徒への対応が可能になる。 <p>5、特別支援教育の体制を整える</p> <ul style="list-style-type: none">軽度発達障害に対応した授業が展開できるような体制をつくる。「どのような場面では」「どのように対応すればいいのか」ということを明確にした体制を学校としてつくっていく。それに対応できるような、校内研修の体制、校内相談の体制（教師＝生徒＝保護者＝関係機関）を整備する。これによって、低学力の生徒のみならず、その他の生徒にとってもより良い学習環境が確保されるものと考えられる。 <p>6、学習カレンダー（シラバス）の作成（個別支援計画ではない）</p> <ul style="list-style-type: none">生徒、保護者向けの簡略化した年間指導計画（学習設計図）である。どんな骨組みを何のために組み立てているのかを理解させる。「自分はいま何を学んでいるのか」「今学んでいることは、何につながるのか」ということをつねに確認させることができる。これを早い時期に提示することにより、生徒の学習意欲が喚起される、学習の見通しがもてる、現在の学習段階を生徒本人のみならず、教科担任以外の教員も一目で確認することができるなど、大いに活用されることが期待される。本年度は、年度末に一年間の授業実践を振り返りながら作成し、来年度初めに生徒に配布する。	

平成23年 学力向上のための取り組み

記入者 佐藤啓二

タイトル	学習意欲の向上と二極化に対する取り組み方法について
学校名	白井市立南山中学校
<p>・定期テストや県標準学力テストの結果を見ると、学力の二極化が見られることが、新たな課題になっている。上位層は授業の進みがゆっくりすぎ、内容が簡単であると考え、下位層は授業が難しくスピードも早いと考えていることが年度末の生徒へのアンケート調査からもうかがえた。また、年度末の学校評価（職員）から「スローラーナー、欠席の多い生徒への補習・補充の配慮ができたか」という個に応じた指導に関わる項目は、前年度よりは上向き傾向であるものの、他の項目に比べると低い値になっている。そこで、個に応じた支援を積極的に取り入れることで、「知識や技能は向上し、学ぶ意欲が喚起され、より多くの生徒に自ら課題を見つけたり解決したりする姿勢を身に付けさせることができるのではないか」と考え、以下の様な取り組みを今年度は実施していく。</p> <h2>1 習熟度別・TTによる指導</h2> <p>〈数学〉習熟度別による数学指導 1年…習熟度別4コース（4クラスを4コースに別に展開） 2年…習熟度別4コース（4クラスを4コースに別に展開） 3年…習熟度別3コース（2クラスを3コース別にし展開）</p> <p>コースの選定については、定期考査だけでなく、日頃の復習テスト等を参考に、生徒本人の意向も踏まえ、定期的の実施していき、より本人にあったコース選定をし、意欲を高めていく。</p> <p>〈英語〉TTによる英語科指導 習熟度別の少人数では、一人一人の声が目立ち、発音などに自信のない生徒は声も小さくなってしまい、全体として声を出しづらい雰囲気になりやすい。クラス全体で大きな声を出す方が、発音は定着しやすい。また、個人の音読練習、インタビューゲーム、練習問題など個々の活動では、一人ではなかなかできない生徒がいるが、複数で指導に当たれば個人を見る機会も増え、下位の生徒にも指導ができ、ペアワークやグループワークでは、下位の生徒にも、できる生徒に教えてもらいながら取り組むことができる。こうした点から今年度、英語がひどく苦手な生徒に対応するためにもTTによる指導を取り入れていく。</p> <h2>2 「朝読書」と「朝の漢字練習」の組み合わせと「校内漢字検定」の実施</h2> <p>月水金は「朝読書」→「読む力」「落ち着いた気持ち」で一日のスタート</p> <p>火木は「朝の漢字練習」→「書く力」→「校内漢字検定」→「努力の結果」「やればできる」自分の発見</p> <h2>3 定期テスト前の「質問学習会」と夏季休暇中の5教科「学習相談」日の設定</h2> <p>テスト前の諸活動停止期間を使い、5教科の教員が学年ごとに別れ、気軽に相談できる雰囲気の中で質問学習会を実施委する。学習内容の質問をはじめ、学習方法のアドバイス等も行う。また夏休み中に、学年ごとの特別補修以外に、5教科の教員が5日程度、教科ごとの「学習相談」を実施する。</p>	

平成23年度学力向上のための取り組み

記入者 三橋良一

タイトル	・「心を耕す集団作り」 ～教科指導の視点で～教師一人ひとりの授業力UPを図る。
学校名	白井市立桜台中学校
<p>○個人として</p> <ul style="list-style-type: none">・全員が「授業力UP研修計画」を立て、1年後の教科担任としての自分像、授業像を設定する。また、4期(前期前半、前期後半、後期前半、後期後半)に分けて、目標、仮説、実践研究、見直しなどに取り組む。 <p>○教科として</p> <ul style="list-style-type: none">・教科会議を中心として、指導目標、指導内容、指導方法など検討、個人の狭い視野にとどまることなく、教科の構成メンバーとお互いに切磋琢磨し、教科指導の充実を図る。・全学年で取り組むこと、学年毎に取り組むことを具体的に決めて、継続的に実践する。 <p>(例) ①国語科 漢字ドリル、行事後の俳句、短歌制作などを実践する②社会科 基礎基本の確認の小テスト、前年度学力テストの結果から定着率の低い分野克服のための小テストを実践する。)</p> <ul style="list-style-type: none">・授業と定期テストの内容、質の検討と普段の授業の評価について検討する。また、テストの結果を数値だけでなく、グラフなどの資料をもとに分析し授業に生かす。・評価については評価する物、評価規準、評価基準など、教科として明確に指導に活かす。 <p>○全体として</p> <ul style="list-style-type: none">・少人数指導、個別指導、エクストラレッスン(補習)の取り組みでは、学力差の大きい生徒の実態を踏まえ、生徒個々の力に応じた指導内容、指導方法などを検討し指導にあたる。・生徒一人ひとりの学力を把握することはもちろん、やる気を育てる生徒指導の視点で教科指導にあたる。そのためにも、学習者としての背景、環境(家庭環境、学級集団、部活動、人柄、得意不得意など)をさまざまな視点で生徒を把握し指導にあたる。・特別支援の視点で生徒の現状を把握し、全職員共通理解のもと指導にあたる。	